

はじめに

本報告書は、東北大学グローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」の東京大学社会科学研究所連携拠点が刊行する研究シリーズの No.5 である。

性別や年齢、出身地、障がいの種類・有無や国籍などにかかわらず、だれもが人格と個性を尊重され、フルに参加できる社会、そのような社会を実現する条件は何か。GCOE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」(拠点リーダー:辻村みよ子・東北大学大学院法学研究科教授)は、そうしたグローバルな課題に挑戦する高度な専門家を養成していく。また、研究の成果を広く社会に還元し、貧困や格差による社会的排除、人口高齢化、根強いジェンダー不平等といった社会問題に対して、有効な公共政策の策定に寄与する。

「社会的文化的性別」と訳されるジェンダーは、文化、エスニシティ、社会階級、年齢、障害の有無などによって、多様な形態をとることが知られており、ジェンダー概念には人間の多様性への洞察が組み込まれている。本 GCOE プログラムが男女共同参画と多文化共生をテーマとするゆえんである。

このような GCOE プログラムのコンセプトにふさわしく、社会科学研究所連携拠点の研究シリーズ No.5 では、本プログラムが 2012 年 3 月 20 日に主催した公開シンポジウム「集中討議・ジェンダー社会科学の可能性」の成果を収録する。このシンポは、辻村みよ子・大沢真理編集によるシリーズ『ジェンダー社会科学の可能性 全 4 巻』(岩波書店)の刊行を受けて企画され、株式会社岩波書店の後援により、東京大学伊藤謝恩ホールにて開催された。

辻村みよ子と大沢真理は、本プログラムの拠点リーダーおよび連携拠点リーダーとしてプログラムの遂行に取り組むなかで、このシリーズ出版の構想を練り始め、2009 年秋に、岩波書店の編集者である藤田紀子氏と共同作業を開始した。藤田氏の高い識見と献身的努力のおかげで、社会科学の各分野のジェンダー化を代表するような論者から力のある原稿を頂戴することができ、予定通り 2011 年 12 月に 4 巻目の刊行にこぎつけた。

シンポでは、これまた社会科学の各分野を代表する論者から、シリーズ出版について鋭くも豊かな批評を頂戴した。執筆者からのリプライおよび総括討論を通じて、シリーズ出版が切り拓いたフロンティアをも超えるような討議が展開された。この研究シリーズ No.5 は、新進気鋭の編集陣の尽力により、たんなるシンポの記録からバージョンアップされたと自負しているが、いかがだろうか。読者諸賢にもご鞭撻をお願いしたい。

連携拠点リーダー 大沢真理

集中討議・ジェンダー社会科学の可能性

本書は 2012 年 3 月 20 日 (10:30～17:45) に東京大学伊藤国際学術研究センター・伊藤謝恩ホールにて開催された公開シンポジウム「集中討議・ジェンダー社会科学の可能性——辻村みよ子・大沢真理編集『ジェンダー社会科学の可能性 全4巻』(岩波書店)の刊行をうけて」(主催:グローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」拠点:東北大学 連携拠点:東京大学社会科学研究所、後援:株式会社 岩波書店)をまとめたものです。

目 次

はじめに	1
開会あいさつ	7
既存の学問の壁を越え、さらにフロンティアへ	8
辻村みよ子 (東北大学グローバルCOE「グローバル時代の 男女共同参画と多文化共生」拠点リーダー)	
『ジェンダー社会科学の可能性』シリーズ刊行に寄せて	10
小島 潔(岩波書店取締役編集局部長)	
ともに新しい社会科学を目指す	11
末廣昭(東京大学社会科学研究所所長)	
第一部 可能性のトポス	13
人権と家族をめぐる法と制度	14
権利が問いかけるもの	15
江原由美子(首都大学東京)	
ジェンダー・レジームの解析	20
広渡清吾(専修大学)	
政治と行政のジェンダー主流化	25
「壁」が意味するもの	27
宇野重規(東京大学)	
憲法とジェンダー —— 憲法学から読む	33
糠塚康江(関東学院大学)	

労働と生活の保障	39
「比較福祉国家／レジーム論」のもうひとつの比較軸	41
埋橋孝文(同志社大学)	
同一価値労働同一賃金、その後——再び、承認と包摂を問う	46
萩原久美子(東京大学)	
地球的視野の政治経済	52
経済学とジェンダー	53
金子勝(慶應義塾大学)	
国際政治経済とジェンダー	58
近江美保(神奈川大学)	
第二部 フロンティアも超えて ——	
『ジェンダー社会科学の可能性(全四巻)』執筆者から	67
壁を超える	69
かけがえのない個から	78
承認と包摂へ	89
公正なグローバルコミュニティを	99
総括討論	106
辻村みよ子(東北大学拠点リーダー)	
大沢真理(東京大学連携拠点リーダー)	
報告者・執筆者プロフィール	111

開会あいさつ



既存の学問の壁を越え、さらにフロンティアへ

辻村 みよ子

(東北大学グローバルCOE「グローバル時代の
男女共同参画と多文化共生」拠点リーダー・東北大学法学研究科教授)

司会(田中) ただいまより、東北大学グローバルCOEシンポジウム「集中討議・ジェンダー社会科学の可能性——辻村みよ子・大沢真理編集『ジェンダー社会科学の可能性 全4巻』(岩波書店)の刊行をうけて」を開催いたします。

私は東北大学グローバルCOEプログラム事業推進担当者の田中重人と申します。本日、第一部の総合司会を務めさせていただきます。第二部の総合司会は岩波書店の藤田紀子さんです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、主催者を代表して、東北大学グローバルCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」拠点リーダー、東北大学大学院、辻村みよ子教授より、開会のごあいさつとシンポジウムの趣旨説明を申し上げます。

辻村 皆様、おはようございます。本日はかくも多数の方々にお集まりいただき、主催者を代表して心よりお礼を申し上げます。本シンポジウムは、昨年6月から12月にかけて隔月で刊行してまいりましたシリーズ『ジェンダー社会科学の可能性』の完結を記念いたしまして、合評会を兼ねて、今後のジェンダー社会科学の展望について皆さんとともに語り合う会として企画したものでございます。本日の会場となります東京大学伊藤学術記念センターホールは、正式には4月からオープンとのことですが、前倒してお借りいたしまして、われわれが



その「こけら落とし公演」をさせていただくことになり、たいへん光栄に思っております。

本シンポジウムの趣旨につきましては、本日のパンフレットの冒頭にも少し書かせていただいておりますが、このシリーズは、「ジェンダーの視点をく横串」として社会科学の諸領域を結集し、『ジェンダー社会科学』というフロンティアを切り拓こう」という試みでございます。

日本でも1990年代後半から、ジェンダー・バイアスに満ちた既存の学問を「ジェンダーの視点」から脱構築・再構築し、人間と社会を多様性において捉えなおす営みが続けられてきました。ジェンダーやフェミニズムの問題は主として社会学で研究されておりましたので、社会学ではとくにジェンダー学会という学会を設立する必要はなかったようです。しかし、たとえば私が属しております法学分野では、ご承知のように男性中心の法制度や判例・学説を反映

して、性差や人間の多様性を顧みないジェンダー・バイアスに満ち満ちた学問が成立しておりましたので、2003年12月にジェンダー法学会を設立いたしました。経済学でも日本フェミニスト経済学会、社会政策学会でもジェンダー部会が設置されるなど、既存の学問を見直す動きが強まりました。

このように個々の分野でジェンダーの視点をとり入れていくことは非常に重要です。しかし同時に、これらを従来のように縦割りの、いわば「タコつぼ化」した学問にするのではまったく意味がありません。ジェンダーの問題がもとより学際的で多様なものであることから、既存の学問領域の壁を打ち破って、これを超えてゆくことが必要です。

実は2003年に21世紀COEプログラムを始めましたときには、ジェンダー法・政策研究を軸とする、ジェンダー法学・政治学を中心にした取組みに限られていました。これに対して、2008年に東北大学と東京大学が連携したグローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」という研究・教育拠点が採択されましたときは、視野を拡大して、ジェンダー平等と多文化共生をクロスさせる視点から「ジェンダー社会科学の確立」を目指したわけです。その成果が、岩波書店の皆様のご支援とすばらしい執筆者の方々のご協力をいただいて、シリーズ全4巻として完結しました。

このシリーズでは、個人・家族、ミクロの視点から、市場や自治体などメゾ、そして国家というマクロ、さらには、グローバルな地球社会、と徐々に対象と視野を広げつつ、日本や世界の現状と課題を鋭く問い、改革の論理を提示することを目指して参りました。

私たちは、これは、既存の学問の壁をこ

じあけて「ジェンダー社会科学」という新しい学問を生み出すこと、すなわち、フロンティアを築くことだと確信して仕事をしてきたわけですが、しかし、この4巻の刊行を終え、今日のシンポジウムの機会を得ました今、さらに、次のステップに進まなければなりません。今日からは、新たなフロンティアさえも超えて、その先を見据えていかなければいけない、という思いであります。

そのために本日のシンポジウムの第一部「可能性のトポス」では、このシリーズ各巻の論点、議論に関して、最適なコメントーターの方においでいただきました。また第二部「フロンティアも超えて」では、執筆者を含めて、ご参加の皆さんから課題や展望を語っていただくことにいたしました。

この4巻が完結したばかりで、正直申しますと少し休みたいという気持ちもありますが、そんな悠長なことを言っている暇はありません。言うまでもなく、3.11で露呈した脆弱な日本の政治・経済・社会構造を全体的にみなおし、立てなおして、一日も早く、安全・安心でジェンダー平等な社会を作ってゆかなければなりません。そのために、ジェンダー社会科学は、一体何ができるのか。何をすべきなのか。ジェンダー社会科学が本当に社会科学を再構築できるのか。ミクロ、マクロ、グローバルの既存構造を変革するための「礎」になれるのか……。今日は集中討議の機会ですので、こういった課題について、活発なご議論いただきたいと思います。

このシリーズを通してフロンティアを提起したばかりですが、さらにそのフロンティアをも超えて、どんどん前に進みたいと思っております。本日は長丁場ではございますけれども、最後までよろしくお願い申し上げます。

『ジェンダー社会科学の可能性』シリーズ刊行に寄せて

小島潔

(岩波書店取締役編集局部長)

司会 続きまして、本シンポジウムのご後援をいただいております岩波書店、小島潔取締役編集局部長より、ごあいさつを頂戴したいと存じます。

小島 岩波書店編集局の小島でございます。私どもで刊行させていただいた『ジェンダー社会科学の可能性』が、昨年12月に無事完結いたしました。普通はそれでよかったということになって終わるんですが、今回は引き続き、その完結を受けてこのように充実した催しを開催していただけることになりました。私どもとしては本当にありがたいことと深く感謝しております。

このシリーズは先ほど辻村先生のお話にもありましたように、2011年6月から刊行が開始されました。岩波書店では毎年、その年の主要新企画案内を2月に取次会社の方々、3月には主要な小売書店の方々に集まりいただいて発表いたします。去年2月のその会で、私は『ジェンダー社会科学の可能性』の刊行開始を取り上げて概略を説明したあとに一言、こういうふうにつけ加えました。

岩波書店は、とりわけ戦後、社会科学のさまざまな分野の名著と言われるものを刊行してきた。今度のこのシリーズは、4冊というそれほど大きな規模ではないけれども、そのような戦後の岩波書店の大切な社会科学の遺産を、ある意味では根底から見直させるような可能性を持っている、そういう起爆力を持ったシリーズであると。

刊行が終わった現在、改めてその思いを



強くしております。と同時に、このシリーズをざっと拝見して、書店としては一つ宿題を頂戴したかなという気持ちでもおります。それは『ジェンダー社会科学の可能性』は深い意味での政策科学的な提案です。しかし、そもそも19世紀、あるいはさらに18世紀にまでさかのぼる社会科学の成立の最初からジェンダー編成が入り込んでいるのではないかと。それは私どもが社会科学の出版に今後も取り組んでいく上で考えていかなければならないテーマではないかということ、このシリーズは私たちに考えるよう促しているとも思うのです。このシリーズを出版させていただいたあとの宿題として、考えていきたいと思っております。

本日は、完結したシリーズの内容についてさらに討議が深められていくのを拝見するという希有な機会です。充実したご議論をうかがって、書店としての今後の取り組みに生かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

ともに新しい社会科学を目指す

末廣昭

(東京大学社会科学研究所所長)

司会 本シンポジウムの共催、グローバルCOE連携拠点である東京大学社会科学研究所、末廣昭所長より、ごあいさつを頂戴したいと存じます。

末廣 皆さん、おはようございます。末廣と申します。東京大学社会科学研究所の所長としての私の任期もあと10日に迫っております。本年度を振り返ってみますと、我が研究所では名称を東京大学ジェンダー社会科学研究所に変えたほうがいいかなと思うぐらいに、大沢真理さんに活躍をいただいた1年となりました。

まず、この伊藤国際学術研究センター・伊藤謝恩ホールについてのご質問が多いようですので、若干ご説明させていただきます。東京大学では寄附をいただけてきた建物には、その寄附をいただいた方のお名前を冠することになっております。赤門を入ってすぐ左にある情報学環・福武ホールは福武書店の福武総一郎さんのご寄附によるものですし、本日の会場からすぐ近くにある経済学研究科学術交流棟・小島ホールは、愛知県のあるメーカーの会長、小島鎌次郎さんが「モノづくりのための本を所蔵する図書館として使っていただきたい」と寄贈されました。

このホールは、イトーヨーカ堂の創業者である伊藤ご夫妻から寄贈いただきました。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、イトーヨーカ堂の創業者は小学校卒業です。そのご夫妻が「日本の若い人たちの今後の研究・教育に役立ててほしい」という趣旨



で私財をなげうち、このセンターを寄贈したのです。まだ木のにおいがプンプンしております。

さて、本日のテーマですが、ジェンダーを研究するための社会科学、あるいは社会科学の中のジェンダー研究というテーマにはなっていません。「ジェンダー社会科学」という、たいへん野心的なタイトルになっているということ。ここにまず気をつけていただきたいと思います。

そして、この近くの建物には経済学部が中心となってやっているREAD (Research on Economy and Disability) というプロジェクトの拠点があります。日本語で言うところの長いタイトルですが、「総合社会科学としての社会・経済における障害の研究」。つまり障害を切り口に、経済学や社会科学を総合的にとらえ直そう、先ほどの辻村先生の言葉を借りれば社会科学の脱構築をやっているというプロジェクトです。さらに我々、社会科学研究所では、2005 年度か

ら「希望の社会科学（希望学、Social Sciences of Hope）」を始めております。経済学や政治学、社会学、法学が学際的にやるというよりも、「希望」を切り口、テーマとして、より新しい形の社会科学を創ろうという試みです。

そういう意味で私は、今日のテーマである「ジェンダー社会科学」も、単にジェンダーを研究するための社会科学ではなくて、まったく新しい社会科学を目指すための第

一步であらうと考えた次第です。複数の社会科学、経済学とか政治学とか法学その他のディシプリンが寄り集まって学際的にやるというのではなくて、まったく新しい社会科学の可能性を開く。そのために本日の会があると認識しております。今日一日の討議が有意義なものになることを心より望んでおります。簡単ですが、ごあいさつに代えさせていただきます。ありがとうございました。

報告者・執筆者プロフィール

総合司会

田中重人(たなか しげと)—————

東北大学大学院文学研究科准教授。社会学。「女性の経済的不利益と家族」(辻村・大沢編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010年)、「親と死別したとき」(藤見・西野編『現代日本人の家族』有斐閣、2009年)、「ライフスタイル中立的な平等政策へ」(辻村・河上・水野編『男女共同参画のために』東北大学出版会、2008年)ほか。

藤田紀子(ふじた のりこ)—————

岩波書店学術書編集部。

座長

辻村みよ子(つじむら みよこ)—————

東北大学大学院法学研究科教授。憲法学、ジェンダー法学。『憲法とジェンダー —男女共同参画と多文化共生への展望』(有斐閣、2009年)、『ジェンダーと法 第2版』(不磨書房、2010年)、『比較憲法 新版』(岩波書店、2011年)、『憲法から世界を診る—一人権・平和・ジェンダー—[講演録]』(法律文化社、2011年)、『ポジティブ・アクション—「法による平等」の技法』(岩波新書、2011年)ほか。

大沢真理(おおさわ まり)—————

東京大学社会科学研究所教授。経済学、社会政策。『イギリス社会政策史—救貧法と福祉国家』(東京大学出版会、1986年)、『企業中心社会を超えて—現代日本を〈ジェンダー〉で読む』(時事通信社、1993年)、『現代日本の生活保障システム—座標とゆくえ』(岩波書店、2007年)、*Social Security in Contemporary Japan : A Comparative Analysis*, Routledge/University of Tokyo Series, 2011 ほか。

第1部 可能性のトパス 報告者

江原由美子(えはら ゆみこ)—————

首都大学東京 理事・副学長・大学院人文科学研究科教授。社会学・ジェンダー研究。『ジェンダーの社会学入門』(共著、岩波書店、2008年)、「ジェンダーフリーのゆくえ」(友枝・山田編『Do! ソシオロジー』、有斐閣、2007年)、『ジェンダーと社会理論』(共編著、有斐閣、2006年)、『女性のデータブック』(共編著、有斐閣、2005年)、『ジェンダー秩序』(勁草書房、2001年)ほか。

広渡清吾(ひろわたり せいご)—————

専修大学法学部教授・東京大学名誉教授。ドイツ法・比較法社会論。『比較法社会論研究』(日本評論社、2009年)、『知的再生産構造の基盤変動』(信山社、2009年)、『市民社会と法』(放送大学教育振興会、2008年)、『比較法社会論—日本とドイツを中心に』(放送大学教育振興会、2007年)ほか。

宇野重規(うの しげき)――

東京大学社会科学研究所教授。政治思想史、政治哲学。『政治哲学へー現代フランスとの対話』(東京大学出版会、2004年)、『トクヴィル 平等と不平等の理論家』(講談社選書メチエ、2007年)、『〈私〉時代のデモクラシー』(岩波新書、2010年)、『デモクラシーの擁護』(共著、ナカニシヤ出版、2011年)ほか。

糠塚康江(ぬかづか やすえ)――

関東学院大学法学部教授。憲法学。『パリの論理―男女共同参画の技法』(信山社、2005年)、『現代代表制と民主主義』(日本評論社、2010年)ほか。

埋橋孝文(うずはし たかふみ)――

同志社大学社会学部教授。社会政策・社会保障論。『参加と連帯のセーフティネット』(共編著、ミネルヴァ書房、2010年)、『福祉政策の国際動向と日本の選択』(法律文化社、2011年)ほか。

萩原久美子(はぎわら くみこ)――

東京大学社会科学研究所特任助教。労働社会学、社会政策とジェンダー。『迷走する両立支援―いま子どもをもって働くということ』(太郎次郎社エディタス、2006年)、『育児休職協約の成立―高度成長期と家族的責任』(勁草書房、2008年)、「労働運動のジェンダー主流化と女性の自主活動組織―英米の先行研究に見るジェンダー分析の視点と日本への含意」(『大原社会問題研究所雑誌』No. 632、2011年)ほか。

金子勝(かねこ まさる)――

慶應義塾大学経済学部教授。財政学、制度経済学、地方財政論。『「脱原発」成長論―新しい産業革命へ』(筑摩書房、2011年)、『新・反グローバリズム』(岩波書店、2010年)、『閉塞経済』(ちくま新書、2008年)ほか。

近江美保(おうみ みほ)――

神奈川大学法学部・人間科学部非常勤講師。国際法、国際人権法。『フェミニズム国際法―国際法の境界を問い直す』(チンギン・チャールズワース著、共訳、尚学社、2004年)、「WTO と女性― 一般的例外規定を手がかりとして」(『神奈川大学大学院法学研究論集』18号、2010年)、『コンメンタール女性差別撤廃条約』(共著、尚学社、2010年)ほか。

第2部 フロンティアも超えて

(進行順、各巻執筆者 *は当日出席者)

ジェンダー社会科学の可能性 第3巻

辻村みよ子編集『壁を超える——政治と行政のジェンダー主流化』

*田村哲樹(たむら てつき)——

名古屋大学大学院法学研究科教授。政治学、政治理論。『デモクラシーの擁護—再帰化する現代社会で』(共著、ナカニシヤ出版、2011年)、『政治理論とフェミニズムの間—国家・社会・家族』(昭和堂、2009年)ほか。

*村松安子(むらまつ やすこ)——

東京女子大学名誉教授。開発経済学、「ジェンダーと開発」論。『エンパワメントの女性学』(共編、有斐閣、1995年)、『「ジェンダーと開発」論の形成と展開—経済学のジェンダー化への試み』(未来社、2005年)ほか。

*伊藤公雄(いとう きみお)——

京都大学大学院文学研究科教授。社会学、男性学。『〈男らしさ〉のゆくえ—男性文化の文化社会学』(新曜社、1993年)、『増補新版「男女共同参画」が問いかけるもの—現代日本社会とジェンダー・ポリティクス』(インパクト出版会、2009年)ほか。

*衛藤幹子(えとう みきこ)——

法政大学法学部教授。政治学、ジェンダー研究。"Vitalizing Democracy at the Grassroots: A Contribution of Post-War Women's Movements in Japan", *East Asia: An International Quarterly*, Vol.25: No. 2(June, 2008), "Women and Representation in Japan: The Causes of Political Inequality", *International Feminist Journal of Politics*, Vol. 12: No. 2(June, 2010). "Reframing Civil Society from Gender Perspectives: A Model of a Multi-layered Seamless World", *Journal of Civil Society*, Vol. 8: No. 2(forthcoming, 2012).

*三浦まり(みうら まり)——

上智大学法学部教授。政治学、現代日本政治論。『流動期の日本政治—「失われた十年」の政治学的検証』(共編、東京大学出版会、2002年)、「「底辺への競争」言説の検討」(『世界』2010年10月号)ほか。

*山下泰子(やました やすこ)——

文京学院大学名誉教授。フェミニズム国際法学。『女性差別撤廃条約の研究』(尚学社、1996年)、『女性差別撤廃条約と日本』(尚学社、2010年)ほか。

ジェンダー社会科学の可能性 第1巻

辻村みよ子編集『かけがえない個から—人権と家族をめぐる法と制度』

*上野千鶴子(うへの ちづこ)——

東京大学名誉教授。社会学、ジェンダー論。『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』(岩波現代文庫、2009年)、『不惑のフェミニズム』(岩波現代文庫、2011年)、『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』(太田出版、2011年)ほか。

*井上匡子(いのうえ まさこ)——

神奈川大学法学部教授。法哲学、フェミニズム理論。「フェミニズムと政治理論—寄与と挑戦」『現代政治理論』(有斐閣、2006年)、「親密圏と近代的自我—アダム・スミスの同感判断論に即して」『公共空間における個の自律—今井弘道先生退職記念論集』(共編、風行社、2009年)ほか。

*紙谷雅子(かみや まさこ)——

学習院大学法学部教授。英米法。「ジェンダーとフェミニスト法理論」『ジェンダーと法』(岩波書店、1997年)、『日本国憲法を読み直す』(編著、日本経済新聞社、2000年)ほか。

*岩本美砂子(いわもとみさこ)——

三重大学人文学部教授。政治学、女性学。『中絶と避妊の政治学—戦後日本のリプロダクション政策』(ティアナ・ノーグレン著、監訳、青木書店、2008年)、「産む—産む／産まない選択が行われる制度的インフラの日仏比較」『生きる』(風行社、2010年)ほか。

*青山薫(あおやま かおる)——

神戸大学大学院国際文化学研究科准教授。社会学、性労働・移住労働研究。『「セックスワーカー」とは誰か—移住・性労働・人身取引の構造と経験』(大月書店、2007年)、「「性」をめぐる自由について—親密「権」を用いた検討」『生—生存・生き方・生命』(岩波書店、2010年)ほか。

小島妙子(こじま たえこ)——

弁護士。ジェンダー法学。『ドメスティック・バイオレンスの法—アメリカ法と日本法の挑戦』(信山社、2002年)、『職場のセクハラ—使用者責任と法』(信山社、2008年)ほか。

藤田英典(ふじた ひでのり)——

共栄大学教育学部教授・学部長。教育社会学。『家族とジェンダー —教育と社会の構成原理』(世織書房、2000年)、『義務教育を問いなおす』(ちくま新書、2005年)、『教育改革のゆくえ—格差社会か共生社会か』(岩波ブックレット、2006年)ほか。

二宮周平(にのみや しゅうへい)——

立命館大学法学部教授。家族法。『家族と法—個人化と多様化の中で』(岩波新書、2007年)、『家族法

第3版』(新世社、2009年)ほか。

ジェンダー社会科学の可能性 第2巻 大沢真理編集『承認と包摂へー労働と生活の保障』

*浅倉むつ子(あさくら むつこ)――

早稲田大学大学院法務研究科教授。労働法学、ジェンダー法学。『労働とジェンダーの法律学』(有斐閣、2000年)、『労働法とジェンダー』(勁草書房、2004年)ほか。

*森ます美(もり ますみ)――

昭和女子大学人間社会学部教授。社会政策、賃金論。『日本の性差別賃金―同一価値労働同一賃金原則の可能性』(有斐閣、2005年)、『同一価値労働同一賃金原則の実施システム―公平な賃金の実現に向けて』(共編、有斐閣、2010年)ほか。

*武川正吾(たけがわ しょうご)――

東京大学大学院人文社会系研究科教授。福祉社会学、社会政策。『連帯と承認―グローバル化と個人化のなかの福祉国家』(東京大学出版会、2007年)、『福祉社会 新版―包摂の社会政策』(有斐閣、2011年)ほか。

阿部彩(あべ あや)――

国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部長。社会政策、貧困研究。『子どもの貧困―日本の不公平を考える』(岩波新書、2008年)、『生活保護の経済分析』(共著、東京大学出版会、2008年)、『弱者の居場所がない社会』(講談社現代新書、2011年)ほか。

*遠藤公嗣(えんどう こうし)――

明治大学経営学部教授。労使関係、労働政策。『日本の人事査定』(ミネルヴァ書房、1999年)、『賃金の決め方―賃金形態と労働研究』(ミネルヴァ書房、2005年)、『個人加盟ユニオンと労働 NPO ―排除された労働者の権利擁護』(編著、ミネルヴァ書房、2012年)ほか。

*田中夏子(たなか なつこ)――

都留文科大学文学部教授。地域社会学、協同組合論。『イタリア社会的経済の地域展開』(日本経済評論社、2004年)、『現場発 スローな働き方と出会う』(共著、岩波書店、2004年)ほか。

宮本太郎(みやもと たろう)――

北海道大学大学院法学研究科教授。比較政治、福祉政策。『福祉政治―日本の生活保障とデモクラシー』(有斐閣、2008年)、『生活保障―排除しない社会へ』(岩波新書、2009年)ほか。

ジェンダー社会科学の可能性 第4巻

大沢真理編集『公正なグローバル・コミュニティを—地球的視野の政治経済』

ダイアン・エルソン (Diane Elson) —————

エセックス大学社会学部教授。フェミニスト経済学。 *Budgeting for Women's Rights: Monitoring Government Budgets for Compliance with CEDAW*, UNIFEM, 2006 ほか。

***足立真理子** (あだち まりこ) —————

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長・大学院人間文化創成科学研究科教授。経済理論、国際経済学、フェミニスト経済学。「グローバリゼーションへのフェミニスト分析—弛緩と越境」『模索する社会の諸相』(御茶の水書房、2005年)、「『従属』の取引」(『現代思想』第33巻第10号、2005年)、『国際移動と《連鎖するジェンダー》—再生産領域のグローバル化』(作品社、2008年)、「労働概念の拡張とその現代的帰結—フェミニスト経済学の成立をめぐる」『季刊 経済理論』(第47巻第3号、2010年)ほか。

土佐弘之 (とさ ひろゆき) —————

神戸大学大学院国際協力研究科教授。国際関係論、政治社会学。『グローバル／ジェンダー・ポリティクス』(世界思想社、2000年)、『安全保障という逆説』(青土社、2003年)、『アナーキカル・ガヴァナンス—批判的国際関係論の新展開』(御茶の水書房、2006年)ほか。

***原ひろ子** (はら ひろこ) —————

城西国際大学客員教授、お茶の水女子大学名誉教授。文化人類学、ジェンダー研究。『ヘアー・インデียนとその世界』(平凡社、1989年)、『健康とジェンダー』(共編著、明石書店、2000年)、「Modernity, Technology, and the Progress of Women in Japan: Problems and Prospects?» in Devaki Jain, Diane Elson(eds.) *Harvesting Feminist Knowledge for Public Policy*, Sage, 2011 ほか。

***高松香奈** (たかまつ かな) —————

国際基督教大学教養学部准教授。国際関係論、ジェンダーと開発。『政府開発援助政策と人間の安全保障』(日本評論社、2011年)、「Official Development Assistance and Human Security in Fragile States: Focusing on Migration from Myanmar», *GEMC Journal*, No. 2, 2010 ほか。

***武田宏子** (たけだ ひろこ) —————

東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任准教授。政治社会学。 *The Political Economy of Reproduction in Japan: Between Nation-state and Everyday Life*, Routledge Curzon, 2005, "Gender-Related Social Policy," in Alisa Gaunder(ed.), *The Routledge Handbook of Japanese Politics*, Routledge, 2011 ほか。

阿部浩己 (あべ こうき) —————

神奈川大学法科大学院教授。国際法、国際人権法。『国際人権の地平』(現代人文社、2003年)、『抗う思想／平和を創る力』(不磨書房、2008年)、『国際法の暴力を超えて』(岩波書店、2010年)ほか。

2012 年 8 月 1 日発行（非売品）

GCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」

社会科学研究所連携拠点研究シリーズ No.5

ISS リサーチシリーズ No.50

「集中討議・ジェンダー社会科学の可能性」

発行所 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL 03-5841-4908 FAX 03-5841-4905

東京大学社会科学研究所

東京大学社会科学研究所 GCOE 連携拠点

印刷所 石川特殊特急製本株式会社
